

わが愛する歌

— 名歌鑑賞 —

二反田

實

時雨ふる野口の築の小屋にこもり落ちくる鮎を待てばさびしき 牧水
斐太人が峽の早瀬に築架けて鮎の下りを待つ時雨かな 夕咲

(福田夕咲全集・一五四頁)

「君は福田夕咲君か、僕だ僕だ、解るかね僕の聲が! (略) 彼と私とは早稲田の学校で同級であった。そして同じ詩歌友達で、飲仲間であったのだ。(略) そして聞くともなく彼の郷里が飛騨高山で(略) 彼も丁度夕飯を喰ひかけてゐたのださうだが箸を捨てて飛んできた。」(増進会出版社刊『若山牧水全集十一巻・或る旅と繪葉書』一・三五—七頁)

右の一文は大正十年九月福田夕咲(一八八六—一九四八)が三五歳のときに、若山牧水が信州白骨温泉から高山へ突然に旅人として現れた時の様子である。夕咲(実名・有作)は高山の旧家に末子(三男)として生れ、長兄の福田耕作(俳号・鋤雲)は、あの滝井幸作に出奔後も援助を続けて、後年滝井をして、「私は大正四年五月から大正八年二月まで、四年間毎月金七円づつ、学資の援助を受けた。毎月送金の振替郵便は、夕咲の筆跡」と「福田家の人達」の中に書かせている。さてその鋤雲は滝井の父程も違う年齢ながら、かつて来高した碧梧桐の門下として一味同輩となした俳友でもあった。鋤雲・夕咲・二男で深川に分家していた東作達は(若山牧水も、滝井孝作も、河東碧梧桐も)よき大正期によき青春時代を、哀と、藹々の中での自由人として生きたのでは。

卷頭言

ある日の暮方の事である。一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。よく知られている『羅生門』の書き出しである。

芥川龍之介は自ら装丁した第一短編集『羅生門』の扉に「君看ヨ双眼ノ色語ラザレバ愁ヒ無キニ似タリ」と入れた。白隠禅師の「君看双眼色不語似無憂」（さあ、その目の色をご覧ください。何も言わなければ憂いがないように見えるでしょう）である。この時から十年、芥川の愁いは彼の生命を削りとった。彼の憂いとは何であったか。言葉である。

辞書のなかの言葉は死語である、文の中に定まる姿で屹立したとき初めて生きる、とした芥川は、自分のスタイルすなわち言葉を発見し組み立てるのに命を削った。

「青蛙おのれもペンキぬりたてか」という俳句など短詩型文芸にも鋭い。江口喚によれば、友人たちに書き送った書簡の端に書かれた俳句や短歌はそれぞれゆうに一冊の本になるという。短歌には真剣に打ち込み「朝顔のひとつはさける竹のうらとしきものは命なるかな」「春雨はふりやまなくに浜芝の雫ぞ見ゆるねてはおれども」などすぐれ「わが門のうすくらがり人に人のゐてあくびせるにも驚く我は」（病中愚作）は自殺直前の心理を鋭く表現している。

一九二七年七月二十四日未明、『続西方の人』を脱稿し枕元に聖書と遺書をおいて永遠の眠りについた。外は雨が降りしきっていた。

（松岡）

太陽の舟 目次

三十二巻 七月号（通巻三〇七号）

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

卷頭言

松岡 三夫 1

二十五首詠

飯塚 裕子 2

阿部正路論（第一〇五回）

須藤 宏明 4

歌誌散見（第八十一回）

豊泉 豪 5

作品Ⅰ

末次 房江 他 6

四月批評（作品Ⅰ）

末次 房江 16

（作品Ⅱ）

相羽 照代 17

合 評（座談会）

角田 順子・土方 澄江 20

選者十首

酒向 一次・渡辺 幸子 21

秀歌抜芳（三〇五号）

高崎 邦彦 22

作品Ⅱ

渡辺 幸子 他 26

房総の歌人香取秀真

吉田 昌夫 33

作歌の目・作歌の技法（第六十六回）

三木 勝 34

歌帖余白（七十五回）

松岡 三夫 35

歌会・支部報告 他

山田（起）・山名・松岡 36

編集後記

題字……………阿部正路

表紙……………イラスト 阿部正冬

春の陽

飯塚裕子

樹の下に日本水仙ひと咲き花びら透かす淡き春の陽
杜の中紅白梅はしだれ咲く陽光浴びて春を匂わす
夕間暮れ能楽堂をば散策す翁(天)いなくもひとり楽しむ
午後八時夜回り来るは「火の用心」昔の風習今も残りにて
久びさに街に出ずれば鳥の声店賑わすは真白きインコ
心友より亡き人の歌集いただきて涙誘いし歌詠みつづく
天上から春の兆しの淡雪は陽を浴びざれば朝露と消え
路地裏の溶けぬ淡雪掻き集め誰が作りしか小さきダルマ
節分祭老若男女豆撒きは寒さ負けじと社賑わす
冬枯れの新宿御苑閑散と淡雪積もりまだ溶けやらぬ

人影も疎らな御苑春近く一足早いカリンの芽吹き

鉄路をば沿いて流るる神田川濠の名残の水門有りし

神田川朝光浴びる水鳥ら群をなしつつ餌を啄む

鉄路脇風圧受けて颯られる花びら舞うは秋桜のはな

内視鏡予約時間が迫りくる頼る人無き心細さよ

ドクターから異常無しとの言葉にて吾胸安堵心安らぐ

頼る人逝きて八年早かれど樂しかりし日日心に残り

寒桜花からはなへ「ヒヨドリ」の蜜を啄み花散り乱れ

寒桜早も満開過ぎしかば風に吹かれて葉桜となる

御涼亭内から眺む景勝は額に納まる絵画のごとく

広大な新宿御苑春を待つマンサク咲くは日本庭園

淡雪の湯島天神訪れし絵馬に託すは合格祈願

日めくりの暦のごとく近づきて春を匂わす新宿御苑

マンションの庭無き部屋は牢獄と終の住処に淋しさ思い

亡き夫と過ごせし家は土^(庭)ありて肌に染みくる樹木の香り

阿部正路論（第百五回）

阿部正路論

須藤 宏明

―新しい生の論理―

昭和四年、無産者歌人連盟は、五月のメーデーの記念として『プロレタリア短歌集』を刊行し、前年から引き続いていたプロレタリア短歌の運動は、ますます、盛り上がりを見せていた。阿部正路は、この歌集から、

パンだ！ パンだ！ パンを与へろ！ 失業者の悲しい
声が街に聞こえる 竹内 一美

「工場へ農村へ」の合言葉で俺達は進もう。奴等の牙城
をたたきつぶすまでは 宇月 房雄

の歌を引き、巻末の「いはゆる歌壇は現になほ封建主義、僧侶主義、宗匠主義が鬱積跳梁してゐる」との発言を受け、

このように〈僧侶主義〉を批判の対象にしているところ
に当時のプロレタリア短歌運動の一特色があるといえる
だろう。そして口語的発想も自覚的に行われた。『短歌
史』 楓桜社・昭和五十六年・一七〇頁）

と指摘している。ここで阿部が言うように、プロレタリア短歌の特色は、社会への批判と口語的発想にある。言い換えれば、口語によるアジェンション・煽動である。問題は、これ

が成功しているか、どうかである。阿部の論での文脈を追うと、成功はしていないと読むことができる。或いは、この特色が、プロレタリア短歌運動の解散、衰退につながると考えられる。何故なら、阿部は、プロレタリア短歌興隆の昭和六年の短歌状況で、釈空の『春のことぶれ』に注目しているからである。阿部は、この歌集から、

もろともに／喰まざるべからず／飢ゑ怒る妻子を／なだめて居る 心はも

の歌を引用し、

こうした〈うた〉を含む「昭和職人歌」、あるいは「泣きあぐる声の みじかさ。／乳児の息の／いや細ぼそと／なりて ゆくらし」など、新しい生の論理を見出そうとした「門中瑣事」などに特色がある。（中略）新しい時代の春を、真剣にうけとろうとした釈空の姿勢をみてとることが出来る。（前掲・一七二頁）

と、釈空の歌の本質に迫っている。釈空の歌は、一見、写実詠の非プロレタリア短歌として読める。しかし、歌われている、飢えてゐる妻子、乳飲み子の泣き声の細さは、まさに貧困に対する怒りであり、或いは、それを容認していて強く生きていくしかない現実である。周知のように釈空は、生涯の独身者であり、妻子もなく、乳飲み子もない。ここにあげられた歌は、釈空が第三者に成り代わって、妻、乳飲み子を抱えた貧困者として歌っているのである。パンの歌にある嘆きや、合言葉を基にという煽動ではなく、貧困者の悲しさと、生き方を静かに重く歌っている。阿部は、それを「新しい生の論理」と評言しているのである。

歌誌散見 第八十一回

豊 泉 豪

「レ・パピエ・シアンⅡ」②

「レ・パピエ・シアンⅡ」十五号（二〇一〇年三月）、十六号（同四月）から短歌作品を鑑賞する。

まずは、巻頭の「子規の四季」と題するコーナーである。ここには毎号「〇月の子規」として、松山市立子規記念博物館学芸員でもある渡部光一郎が選んだ子規の一句に、各同人が短歌を寄せている。十五号では「三月の子規」として「化物の名所通るや春の雨」が掲げられている。これに対し、

・ 化物のその名はにんげんといふらし春雨に濡れるていと妖し

服部 一行

化物や幽霊よりも、生きている人間が一番怖いのである。化物こそが人間、あるいは人間こそが化物。しつとりと音もなく降り続く春雨に濡れて妖しく立っているのは、やはり女性だろうか。不安定にまたがっていく句と句の絡みつくような据わりの悪さが、一首の表現する世界に相応しい。

同じ欄からもう一首あげる。

・ ひらきぬし傘をつぼめて春の雨のささめく声を収めむとすら

大辻 隆弘

第三句を春雨（はるさめ）ではなく、あえて春の雨（はるのあめ）と字あまりにし、第四句につながるリズムをわずか

に停滞させている。これにより「ささめく（＝ひそひそとささやく）声」という表現がありふれた比喻としてではなく、現実的なものとして立ち上がってくるように思われる。そこから化物を思わせる妖しい不気味な声が聞こえてくる。傘という道具立てでも効果的である。

・ とりどりに数万のキャップ集めらるその一途さも罪かもしれず

黒田 瞳

「エコキャップ運動」の詞書がある。ペットボトルのキャップを集めてお金にし、途上国の子どもにワクチンを送る運動である。ここでは大衆が一途に同じ方向に向かった際の危うさが歌われている。その危惧や違和感を「罪かもしれない」としたところに一首の価値がある。キャップが集まり過ぎているという現実の問題は別にしても、集められた数万ものキャップには、リスクを負わない楽天的な善意に潜む、ある種の欺瞞が見え隠れする。多くを考えさせられる一首である。

・ 白梅の花咲きたりそのみぞ輝くばかり欠損の白

奥村 和美

これに続いて「白票を投ぜむとする開くとき白紙は燃ゆるがに美しき故」が置かれている。白に〈何もなし〉という意味があることは誰もが知るところであるが、それを「欠損」という意味にスライドさせ、さらに「輝くばかり」「燃ゆる」という美＝価値を見出す感覚が鋭い。作者の「白」に対する偏愛がうかがえるようである。白梅の「欠損の白」が、この世ならぬ世界への入り口になっているように思われる。

五月批評（作品Ⅰ）

宮島マツエ

・敷島の大和漢字はそれぞれに深き意を持ち彼女ら悩ます

酒向 一次

フィリップンから、看護師等研修の為、来日中の女性は日本語も医学専門書も、漢字の習得が必須です。高齢化に伴う日本の、看護師等の不足を追求する、深い内容の作品

・除雪用の重機県都に五百台その一台に子が乗る深夜

土橋 茂徳

人や車の途絶えた深夜、除雪車が町中をフル稼働。その中の一台に、お子さんが一役買って除雪に出る。深夜・重機の五百台に迫力があり、北の大地の厳しさが伝わります。

・風も音も白一色に雪は染め斜里の原野の視界を閉ざす

高崎 邦彦

広大な斜里原野に立てば、雪 雪 雪 視界は白一色風も音も雪に消された。北海道ならではの、雄大荘厳な雪景色。この白い世界を見事に詩われ映像が浮かびます。

・夕暮れに夫手づくりのぶらんこを二人で漕ぎつ言ふこともなし

原武 寿子

明るさの中におかしみのある、童心そのままの家庭。ぶらんこを作るご主人も、世の中に滅多にはいないでしょう。そのぶらんこに作者も乗り、大満足している。このような原風景を見たいものです。メルヘンの世界です。

・わが心人に合はせる苦しさと人に従ふ気楽さを持つ

森本 元昭

おだやかな生活を送る為には、心ならずも人により添い時としては、人の意のままに従う安易なことも。柔剛ないまぜの生活。これも暮しの織りなす綾だと同感です。

・裸木の林檎園数多雪の上に真っ赤に実るを描きみるかな

照山 好子

真っ白い雪の上に裸木の林檎園。秋になると真っ赤な色をつけた林檎が、枝もたわわに実るであろうと、心のキャンバスに描きみる。期待と希望、充実感にあふれた作品。

・黙しても語りてもよき友ありて酒は静かに進み減りたり

二反田 實

気持ちの通じ合う友と、どの位語り続けた事だろう。話が弾み昂揚する時もあれば、とぎれて黙の状態になる時も鈍子だけは傾いたまま。雰囲気のある心のなごむ歌です。

・昏れつかた眼鏡はたちまち曇りをぶひと日おびただしきものを見てこし

月田 藤枝

夕方になると、心も体もすっかり疲れ果てた作者。具体性はないが、一日のご苦労が下の四句五句に集約される。身辺の切なさが滲みでて、一生懸命さが伝わります。

・太陽の光追ひつつ花鉢の位置を替へゆくわれは召人

諸 幸子

いかに花を愛しているか。季節によりまた一日の中でも太陽の動きにより鉢を動かす。諸さん私もそうなんです。

五月批評（作品Ⅱ）

鈴木 熹子

・夕やみの空に孤を描きつつ飛行機はキラキラ光りキラキラ消ゆる 江面 伸子

飛行機の夕焼け空の見上げに共感。どこまで飛ぶのか想い浮かべるうちにキラキラ光りキラキラ消えるくり返して夕景の余韻を盛り上げたすてきな一首。

・無念にもトヨタリコール 勤めし息子心・技尽くして超えよと祈る 山本 賀子

息子の職場を詠んだ作者の母と子の絆の糸を感じる一首。現代社会の変化の激しさに生活が揺れ、職場の厳しさに平和の大切さを祈る母心に同感。

・青天の上州過ぎてトンネルを出ればまぶしい銀世界なり

湯本 いと

トンネルを抜けるとそこは別世界。昔日に読んだ小説を感じた青春の思い出と共感。

人生もトンネルを抜けて味わうまぶしい銀世界が素敵な一首

・花こそは暖かき心導くものわたしの部屋を終日照らす

渥美 崇子

花に心が導かれると詠む先輩のうた人の心の豊かさに感激。終日花をくらしの中に取り入れた生活の匂う一首に生きる喜びが赫く余韻。花に、家族に心をくばる暮らし方に清風を感じず。

・庭隅に春を知らせる犬ふぐり星ちりばめる如く咲きたり

伊藤 モト

「星ちりばめる如く咲きたり」に枯れた庭の土を動かして

に日差が和らかく光りの届く庭の清々しさが伝わる一首。早春は生き生きと花も人も励まされる温もりがいい。

・路の臺樁の白を活け込みて春の息吹にぬくむ玄関

今井 芳枝

冬去りて春の訪れを待つ人にちよっぴり先駆けを知らせる路の臺を玄関に活ける作者の心情が詠まれ路の臺のさ緑と樁の葉の艶と花の白の置かれた玄関にすい寄せられた。

・何気なく死のことなどを思ひし夜着替へし衣類きちんと畳む 岩橋千代子

「着替へし衣類をきちんと畳む」など日常をさりげなく行なう生活の清々しさが伝わり、作者の背すじの伸びた心がいじむ一首に共感。

・辞書五冊に囲まれ酒を少しだけ呑んで運命を詠む傘寿です。 君塚 一雄

「少しだけ呑んで運命を詠む傘寿です。」と語りかける口語のうたに想いの深さを感じる。五冊の辞書が老い行くほどに物事がすけて見え始め学ぶ楽しさが広がる一首。

・天秤の両にマンゴー山と積む肩しなやかな青きアオザイ

石塚 立子

旅先の人びとの生き生きとした生活や市場の様子が浮かびさわやかさが漂う。現地の風俗をカタカナ入りの詩に表現され異国の旅愁の広がり共感。

・北へ飛ぶ雲の速さや風の音春の嵐の去るを待つなり

角本 静江

宙を見上げ異常な天候の春のうつり気な風情に耳を澄ませて詠み上げた新人の一首。去ってはまた来る日々の変化を読み続けてほしい。歌友に拍手。

合評

座談会

司会 では、本年七回目の合評を始めます。今月は五月号掲載の中から四首選んで行います。先ず最初は、大田支部の庄司久恵会員の

朝挿しし一本の薔薇解かれゐてやさしきことば灯影にこぼすです。如何でしょうか。

I 「薔薇解かれゐて」、「ことばをこぼす」という事。これらがこの歌の眼目です。良い歌で、大きな欠点も無い歌だと思ふ。

S 私は「解かれるて」が気になりました。薔薇の花が自然に開いている、という意味で使っているのだしたら、「解かれるる」は他動的なので一寸、合わない気がしました。花びらがほぐれている、というなら解りますけど。

T そうです。「解かれゐて」をどう考えるかで、この歌の解釈が違ってきます。私は、薔薇の花びらが散って落ちたと考えます。そこに役目を終えた花の安らぎと、それに共感する作者の心情を見ます。だから自然と出た作者の独白とも取りたい。

I 初句で「朝」と断っていて、結句で「灯影」と言っていますから夜でしょう。だから、薔薇は散ってしまった、と解釈してもおかしくないですね。

Y 私は、散ってしまったとは思わないで、作者の心寂しい日常に、薔薇のふわりとした花びらの影が優しい言葉をこぼしているように感じられた、と解釈しました。

T では、この「こぼす」はどう解釈しますか。「愚痴をこぼす」とは言うけど。

I 言葉をこぼす、とはあまり使いませんね。

S この歌は作者独特の感性の歌だから、なかなか正しく理解するのは難しいです。

司会 それでは、次は伊豆支部の辻本わか子会員の満一歳大きな瞳で真剣に力をこめて立ち上がる孫です。どなたからでもどうぞ。

T とても解りやすい歌ですね。四句目の「力をこめて」は要らないです。取ったほうが良い。

I そうですね。「真剣に」だけで充分解ります。

S では、「力をこめて」の代わりに何を持ってきたら良いかしら。

T 孫の具体的な動作で、例えば、掴まり立ちをして立つわけだから、手を伸ばすとか、脚を曲げるとかですね。

Y そうね。赤い顔になるとか、がにまたになる、とか満一歳はいろいろな恰好をしますね。

司会 ある地方では、満一歳の誕生日に一升餅を背中に背負わせて立ちあがらせて成長を祝う、という風習があると聞いていましたので、それを一寸、思い出しました。

S この状況は、掴まり立ちから更に進歩して、自力で立ち上がる時の様子なので、Yさんの言われた後に、「赤い顔して」等、お孫さんの具象を詠み込まれたら、と思います。

T それから、結句の「孫」の位置を一寸、変えて「孫立ち上がる」にしたほうが良いです。

Y 成長していかれるお孫さんを、作者も真剣に見守っていらっしゃるからこそ、そこに感動が生まれるのですね。気持ちの良い祖母の歌になっていると思います。

司会 三首目は岐阜支部の梅野路会員の

四つの座の一座のみ占む炬燵居に帰る夫なくしんと淋しきです。Sさんからどうぞ。

S 炬燵は座るところが四つあるのに、自分一人だけ座っている。本当に淋しいですね。私も経験があるのでよくわかります。ただ、この歌からでは仕事でまだ帰って来ない夫なのか、亡くなった夫なのか、はっきりわかりません。

T 作者のご主人は元氣です。ただ何かの都合で帰宅が遅くなったのかもしれない。四句目の「帰る夫なく」という表現では、夫は生きているのか、死んでいるのかわからないですね。I こういう歌いかただと、読み手のほうはだいたい「死んでしまつて戻らない夫」を想像しますね。

Y 私は「四つの座」がなかなか解りませんでした。座敷が四つあって、その一つの座敷に炬燵があり自分が座っているという歌かな、とさんさん考えてから、これは四角い炬燵の事だ、と解りました。だからこは、「一座わが占む」としてみてはどうかしら。

T やっぱり、「わが」は無いほうがいいです。

S 居るべき人が居ない淋しさと、死んでしまった人を思う淋しさとは全然違いますね。

T そうだと思えます。雪の降っている夜に、居るべき人が居ない淋しさは深いですよ。「帰る夫なく」をやめて、下句を「夫まだ来ずてしんと淋しき」と直したらどうでしょう。

I 「しんと淋しき」が表面的で、体験をつきつめた言葉になっていない。だからSさんの意見を参考にしたい。

司会 四首目は、品川支部の吉田律子会員の

この頃になって気が付くこと多し何を拾って何を捨てたかです。どなたからでもどうぞ。

I 下句の「何を拾って何を捨てたか」と言わないで、具体的に拾った事物、捨てた事物を入れた歌にしなければいけない。そうすると、もっと字数が必要でしょう。その時に上句のごたごたした文もすっきりするでしょう。

S 私もそう思います。作者に「それで結果はどうになりましたか」と聞きたくなりましたね。

Y そうですか。この作者はいつも面白いところを歌に詠んでいますよ。

T この歌では上句を直したいですね。初句に「この頃」と切り出してくるから、それはいつ頃ですか、と作者に聞きたくなりますね。「この頃」をはっきり表現すれば真実めいてくるんです。

司会 それでは、上句をどのように変えたら良いですか。

T 具体的な自分の年齢とか、状況とかを詠むと良いと思います。例えば「人生のとぼそに立ちて」とすれば、下句も生きて来ます。ある年代からある年代へ足をかけた時ですね。

Y 「とぼそ」って、何のことでしょうか。

T 「とぼそ」は「とぼそ扉」のことですよ。

Y ではこの歌は、「年代の扉に立ちて気付くこと何を捨て何を捨てたか」と直りますね。

S その方が良いですね。人生の節目の時って、誰でもいろいろな事を考えますもの。

司会 今回は、やさしい心の歌、孫を見つめる歌、夫を待つ妻の淋しい心の歌に人生気付きの歌とそろいました。本日はこれで終わります。ありがとうございました。

(記録 山田紀子)

選者 角田 順子

敷島の大和漢字はそれぞれに深き意を持ち彼女ら悩ます

酒向 一次

ひと吹きの風に梅が香匂ひきぬ風邪の病の鼻より癒えて

塩田 秋子

東京に薄らと雪の降り積みし椿の葉の上果無く消ゆる

志賀 倭子

胸深く澱みしものを放たむと冬沼に白き鳥を見に来つ

末次 房江

杜氏より米一粒に命あり元禄二年創業続く

鈴木美智子

オীগニック言葉のひびきに負けさうな細葱に春のしめり

杉山 榮子

梅の香を求めて曾我の梅林へ木木の間小鳥群がる

善波 一江

紅嵐溪トンネルぬけて香積寺紅葉の色も七色に染む

外箴よし枝

三界の首枷と言わるる子を持ちて孫とふかるき宝授かる

武田 節子

教へられ夜の広間に布を裂き草鞋作りの仲間に入る

塚本 正子

選者 土方 澄江

白富士を望めば思ほゆいつの日か日々拝し得る地に住まば

やと 佐田 孝義

チョコレート娘から夫へのプレゼント 先づは先祖に供え

てからと 善波 一江

氷上を華麗に舞へる少女らの国の名かかげ花となりゆく

戦ひの終りて肥後の故郷へ戻りし後の歌のいとほし 多久和玲子

春の宵ひとり歩めば臃なり上野の森の等伯を観て 土屋 道子

早咲きの花の下枝さゆらぎて目白二三羽蜜吸ふらしも 松岡 三夫

花かずの少なきテラスに桜草冬日いだきて日毎咲き継ぐ 松本 啓子

立ちどまりまた歩き出す吾の足気付けば春の気流れあるな 八代 陽子

りと 井上萬里子

あとひとり耐ふれば勝てし試合ぞと四十五年後の痛恨を言 奥田 清

ふ オリピック極限の技観る者に打ち込む姿神をみむかな 河野 静子

選者 酒向 一次

鶏鳴に目覚め一人の時すこす今日の平安子にもあらな
む 塩田 秋子

悠悠には遠く日日過ぐ悠悠はあこがれにして青い鳥か
も 武田 節子

雪解けのなき梢には白く咲く花と見紛ふ残雪ひかる
塚本 正子

雪の朝麻痺の青年召されゆく負いにし性と腕輪を部屋に
手塚 ミツエ

心内を打つるわしき言の葉に辿り着き得ぬ路の違ふや
富永 道子

ようように春めく朝のベランダに初音ききつつ洗いのほ
す 八代 陽子

さざ波の尽きし彼方に立つ雲は雪いだきしアルプスの
峰 よしだ ゆきお

天神の苑に咲き初む紅梅の今朝はうっすら雪化粧し
て 伊藤 モト

少しだけ陽の当たる土盛り上げし黒き土うごかす土竜の
力 江面 伸子

幾歳を富士の磐根を潜りきし柿田の水をわれ今汲むも
大橋 俊弘

選者 渡辺 幸子

山ありて海ありて富士の輝きて一陣の風吹くみかんの山路
永野 昌子

この春も彼の裏山ゆ鶯の声聞こえてうなづき安らぐ
佐田 孝義

遠き日の十五で親鸞渡されし難しかったと老いて読み解く
鈴木 薫子

あたたかき陽に迷はされ花咲きしいちは昨夜の霜に凍れ
原武 寿子

引越の整理の途中たじろいで思い出刻む吾の仕事あ
と 森 五貴雄

乙女の祈りミスなく弾けば運勢は大吉とする今朝の占
い 相羽 照代

立つ春の霞にけむる富士おぼる野辺の小道に季を愉し
む 大橋 俊弘

何気なく死のことなど思ひし夜着替へし衣類きちんと畳
む 岩橋 千代子

開きたるスコアブックに一期の打甍るなり 熱き酒酌
む 奥田 清

誰にでも縋りつきたき夜もあれど白き孤高のわが道を行か
む 君塚 一雄

暮れゆくは丹沢大山箱根山尾根遠近の我視野に立つ

永野 昌子

作者の故郷は大磯。その大磯から朝な夕な眺める丹沢大山系、箱根連山を雄大に歌い上げた巻頭二十五首詠は、大自然に触発された自らの生への回帰を伴い私に深い感銘をもたらした。明治より東京に近く風光明媚であるがゆえに多くの文人墨客が住んだ大磯。その文化の香りを豊かに内包した多くの秀歌。故郷大磯を自らのものとして歌い上げた拔芳歌はその嚆矢の一首。そして目を転じればそこに相模湾、相模灘が大きく広がり、更に目を転ずれば霊峰富士が大きく屹立する。「怨霊の泣き野ヶ原で夫を待つ新妻哀れ悲劇の川止め」、大井川の川止めが待ち切れず新妻に会う為溺れ死んだ夫の名を呼びながら女のさ迷った台地に建つ「愛の地蔵尊」の話。この様な豊かな土地柄ゆえに「現身のこの世に生を受けしより苦悩死厄は満ち溢れいし」の人生観へと凝縮する。当然ながらそこに心の救いを求める「苦悩より逃れんとして経を読む菩薩の道は遙かに険し」が読み込まれ、掉尾の一首「夕雲の匂える箱根の山の彼方今日もまっかな夕陽沈みぬ」と静寂の中で終わる。正しく大磯の自然を我が物として生きた作者の人生絵巻が美しく描き果せたのだった。

孫嫁に来てくれないかと爺さんが言えばにっこりフィリンの女ひと 酒向 一次

日本人のなりたがらない介護の世界にフィリンの女性を導入しようとした国家施策。しかし現実には言葉の壁が大きく立ちちはだかる。作者はそんな困難な仕事の一翼を担っているのである。拔芳歌は、そんな女性の現場での最高の誉め言葉をもたらした喜びを詠んだもの。しかしそれは作者自身の喜びでもあったろう。教え子が成長する姿ほど嬉しいものの外にあらうか。それが教師なのだ。

まっすぐに群れたちあへる孟宗の冬の疾風に搏ちあひてをり 末次 房江

久し振りに作者の鋭く清澄な歌群に出会った様で嬉しくてたまらない。「冬の詩」七首、深く心に沁みた。拔芳歌、手入れの行き届いた孟宗の竹林はまっすぐに群れて立つ姿が美しい。その竹林が疾風に激しく揺さ振られ騒めく。それを搏ちあうと表現した。「搏」は単に打つのでは無くお互い手を打ちなぐる姿。そこに冬の疾風の激しさがある。あるいは雹なども混じっていたかもしれない。

札幌に生れし娘の初雛むすめを飾りしよ 今宵「雪まつり」 報ず 多久和玲子

御主人の仕事の関係で転勤が多かったと聞く。娘さんは札幌に住んでいた時に生まれた。その初

前々号 (305 号) 秀歌拔芳

節句に雛人形を飾った。「よ」は詠嘆。一字あけはその思いの深さを表現する。その心を触発したのは「雪まつり」。この初雛を飾る行為は当然娘の幸せを祈ってのものではあるが、亡き夫と共に生きた人生への限りない追憶と哀惜であった。

三界の首枷と言わる子を持ちて孫とふかるき宝授かる

武田 節子

「子は三界の首枷」と言う。切っても切れない深いきずな。それが子。しかし孫はそれ程深くは無い。「かろき宝」だと言う。孫を持って初めて分かる事は沢山ある。子とは別のかわいさ、いとおしさ、そして次の次の世代に受け継がれて行く命への言い知れぬ安堵と満足。それ等全てを総合してもかろい宝だと言う。それは育てる責任の軽さであって、決して愛情の軽さでは無い。その微妙な綾を見事に表現した。

水草もストレス感があるらしい葉の淵側が黄色になりて

豊島 英明

「葉の淵側」とは面白い表現。広辞苑によると「淵」は「川や沼、湖などの水が淀んで深い所」とある。又「浮かび上がることの出来ない境涯」ともある。拔芳歌の淵は水草を詠んでいるが、意味は後者と考える方が適当であって、このストレスは水草に仮託して自ら

の心境を詠んだものであろう。まだ自らの人生の先を見定める事が出来ない不安な心を。一様^{いちよう}に首より名札吊るしたる教室の教師のさまは馴染めず

長須 正文

テレビドラマなどで、首から名札を下げて得意気に歩くサラリーマンの姿が写し出される様になったと思ったら、すぐ教育現場にも広がった。私が在職中に必ず首から下げる様にと渡されたが、最後まで付けなかった。おそらく私だけだったと思う。信頼関係が大切な教育現場が存在証明で成り立つなど考えるその考えに我慢出来なかった。私の早期退職の理由の一つでもあった。作者は元校長。作者の様な先生が長であつたらとつくづく思う。

まつぶさに臨死体験せし友の語りにれかむ春寒の夜半

松本 啓子

「まつぶさに」は接頭語「ま」と副詞「つぶさに」で「完全に」、「にれかむ」は反芻するの意。鮮明に死の世界を見て来た友の体験談を一人春の寒い夜中に反芻していると言う作者の思いとは。私の義父も作者と同じ年齢。この頃精神、肉体共に弱って来て死を口にする様になった。最近作者も病気がち。拔芳歌を詠んだ作者の気持ちや悲しみと不安が募る。死は一定なれど現世は二度と無い。

朽ち果てた梅の老木雪のなか皮一重でも花を咲かせり

丸山孝一郎

冬の奥日光で見た光景。生きる本能はまるで老いて行く者への応援歌。たとえ皮一枚でも地中から養分を吸い取り生き続け花を咲かせる。それもこれ以上無い寒い雪の中を。作者はその梅の木の持つ強い生命力に感動したのであるが、それは自分自身を鼓舞する鋭い目でもあろう。功あり名を成しても尚自らの成長を求めてやまない作者の生き様に深い尊敬の念を覚える。

古本の買い取り手もなくあきらめの未練もすてて焼却場へと運ぶ

森 五貴雄

家の庭にある倉庫を見せてもらった事がある。作者が、三晃社〈東京学芸館〉社長として長年発行した書籍がうずたかく積まれていた。抜芳歌の「古本」とはこの作者の発行した書籍なのだ。つまり、これは作者の人生の軌跡、生きた証し。それを引越しの為に処分する。焼却するなら誰かにと思う心は未練。自分の人生は我のみぞ知る。そしてそれは焼却炉の中で白い灰となった。

老い人の力合わせて生くる日を楽しと言ひし亡夫想ひ泣く

山本 賀子

「老い人」とは作者と夫を言うのであろう。歳老いて尚、中睦まじく、力を合わせて生きていると

言う実感を持って生きられる人はどれ程居るのであろうか。しかもその日々を楽しいと自覚し、確認し合って生きる夫婦はどれ程居るのであろうか。私はあまり知らない。そう詠える作者の幸せを思う時、結句の「泣く」が強く強く私に響いて来る。手打そば得意な母が残したる延棒宝のごとく生家に

湯本 いと

作者の故郷は川端康成の「雪国」で有名な越後湯沢。雪の深い所。今でこそ新幹線や高速道路で東京からは近くなったが当時は辺鄙な田舎。日本の農山村では、蕎麦は祭礼や正月、来客時の御馳走であった。どの家でも蕎麦打ちの技術を持っていた。作者の家の技術者は母であった。楽しい祭りや正月、お母さんとの思い出は蕎麦と不可欠。その思い出の中心に宝のように延棒はあった。それは又作者の心の宝物でもあった。

目は見えず鼻も臭わず耳もだめ食欲散歩のみを頼りに

吉田 昌夫

その犬は十七年前の三月三日目も見えぬ状態で草むらから発見され家族の一員になったと言う。犬の年齢を人間の年齢に換算する事はあまり意味の無い事かもしれないが、犬の年齢十七歳は人間の百二十四歳に相当するそうだ。犬の平均寿命は十一歳程。十七歳はとてつも無い長寿。ここまで

前々号 (305 号) 秀歌拔芳

慈しんだ作者と家族のやさしさは、拔芳歌の結句「頼りに」に全て言い尽くされている。祈るように食欲と散歩を見詰めているのだ。

春耕の畑にうつすら風紋の如くに見へて淡雪の朝

遠藤 剛

今は畑仕事にいそむ作者。命への、その命を育む土への深い思いにいつも感動させられるが、拔芳歌は春の淡雪を被って風紋の様に見える春耕の畑の畝を詠んだ。何を植えたのであろうか、規則正しく作られた畝にうつすらと雪が積もり、高低と濃淡は見事なまでに美しい世界を現出した。やがて昼ともなれば消えてゆく雪であらうがそれが又後の稔りを約束する。自然が輝く。

七たびの辞令のままに異動せし穴埋め人事の己が意思なく

北川 昭

作者の「過去断章」を読んでいると、サラリーマンの過酷な生き方に驚ろくばかりだ。私も五回職場を移動したが、自分の意志に反した移動は無かった。私の場合は職の移動であり、人事の異動では無く、自分の意志であり、決して意思では無かった。「想い遺して」「歯車として」「これらは皆、個人の思いに斟酌しない組織の冷徹さを告発して重い。しかし作者は決して自らの生き方を否定はしていない。

人生のただ一日の身を無為に過せし刻を寂しむ

木村百合子

「さらさらと指からこぼれ落つるがに時の流れはとどまるを知らず」人生ただ一度の今日の日は無為に過ぎて行く。「昨日またかくてありけり今日もまたかくてありなむ この命なにをあくせく 明日をのみ思ひわづらふ」は藤村の「千曲川旅情の歌」の一節。古来多くの民はこう思うことすら出来ずに生きて来た。今はこうして、自らの生き方を思いながら、刻を慈しみ、自らを寂しむことの出来ることが真実豊かなのであり、人として幸せなのだ実感する。

細ぼそと身の丈に合ふ商ひを続けてゆかむ生き甲斐として

久保田昭江

作者は下駄屋の商いの事とその店のある商店街の人々との交流を多く詠う。それは嫁いで来て以来半世紀以上もの長きに渡り続けて来た生活であり、作者を見守ってくれた人々であったからだ。拔芳歌は何百回詠っても決して古びることの無い作者の人生の今この時の総決算とも言えるべき歌である。しかしこの総決算は又進化して行く。そして又新しい歌が生まれる。歌はこれで良いのだと思う。身の丈に合った生き方をしてそこから生まれる言葉をこうして歌にする。そこにその作者独自の歌の命がある。

作歌の目・作歌の技法(第六十六回)

作歌の技法(長歌編・4)

三木 勝

この稿「作歌の技法(長歌編)」における長歌は、本誌平成二十年六月・十二月号、同二十一年六月・十二月号の「長歌特集」における掲載歌から引用させていただいた。四回の特集で、合計五十一の長歌が掲載されている。幾度も読み返すうちに、それぞれの長歌の持つ美しさ・力強さそしてその長歌を読む作者の心根の優しさに幾たびも感動させられた。ひとつひとつに敬意を表しコメントを記したいが、紙数の限りがあるので、以下要約的に述べることでお許しいただきたい。

北川昭の三作は連作である。『我が短歌の端緒』は夜汽車の中での女性との出会い。「寝もやらず語り明かせし」夜汽車での出会いの青春を歌う。『おもかげはるか』では、その女性からの文により「結婚とは生活なるか」との青春の蹉跎を味わい、同作品の反歌では「杜の都の女娶る蝦夷のひとつと轍踏まずして」とある。『妻の還暦に旅す』の反歌は「伴にする旅先なればいずこにも離れがたきに清涼の秋」で、「杜の都の女」との幸を歌う。この作者の日本の会社を歌う『過去断章』の視点も貴重である。「歌をもて生き長らえることはなし赤字にあらば誰が支えむ(北川作)」。北川昭の世界は、始まったばかりかもしれない。

酒向一次の三作『迎え船』『第二里行』『青春の夢』は、群

作である。商船士官を夢見て商船学校に入学した作者は十七歳で終戦を迎えた。その前後のことが叙事として読まれている。意識的に連作に組み変えていけば、問題点が更に整理され、大東亜戦争や朝鮮戦争への参画の空しさが際立ってくるであろう。『第二里行』の反歌「我が兄に食んでくれよと海に投ぐ米軍戦場食の缶を切り裂き」。

玉川愛子の『訣れ』は「信濃の義母」を読む。『信濃の義母』を読む作者の歌は美しい。頼園に生れし作者は『俱会一処』を読み『全生園(一)』を読む。『全生園(二・三・四)』と作者の今後の長く苦しい活動に期待したい。

末次房江は『義父死に給ふ』で「不知火の海に流るる矢部川にそひつつ棺村を去る流れも清き川の面に大楠深く影うつし・・・」と読み、その反歌は「ノモンハン・ビルマを生き返りたる父の戦後の長きも終る」。この悲しみは、『俘囚―敗れしもの』の「悪路王・アテルイ無念のまぼろし」につながる。この長歌の基歌の結びは「忘れられし敗者の歴史さだかならぬ跡を訪ねて人につききぬ」である。

紙数は尽きた。四回にわたる長歌特集を省み、幾度も読み返して、歌に感動するとともに、太陽の舟短歌会の会員が如何に深く長歌を愛しているか、その大切さを自覚しているかを知って感動した。師を持たぬ太陽の舟短歌会は、自らを師とし、自らが長歌を作ることを通して叙事とは何か、短歌とは何かを学ぶ。今回ふれる事ができなかった作者の方々には敬意を表しつつ、二拝してお詫びを申し上げます。

(長歌編・了)

歌帖余白（七十五）——編集雑誌記——

松岡 三夫

番外編 短歌と文章修業

短歌の師は阿部正路先生と島田修二先生。両師ともはや天上の人です。俳句は林翔先生と倉橋羊村先生。俳句も短歌と同時に平成十五年始めました。林先生には昨年九十四歳で亡くなるまで月一回の沖の句会で主宰の能村研三先生とご一緒に指導いただきました。倉橋先生にはこの春病で倒られるまで深川の芭蕉記念館で月一回の句会で懇切に教えて戴きました。

林先生と倉橋先生は共に『馬酔木』の水原秋桜子の弟子。水原秋桜子の門下生では、能村登四郎、藤田湘子（共に他界）、林翔が三羽鳥として名を馳せたことは有名ですが、二十年ほど若い倉橋先生は、いまも俳句結社誌『波』を主宰しておられます。現代俳句協会の副会長でもある倉橋先生は、『渾身』『愛語』『打座』などすぐれた句集を持つ俳人ですが、『道元』『禅僧山頭火』などの著者としても知られる作家であり卓越した文章家であります。

その倉橋先生に「秋桜子の文章会」という一文があるので直接伺ったこともまじえ、文章修行について述べてみます。秋桜子の文章会は毎月一回西荻窪の喜雨亭（秋桜子邸）で開催。各自の持参した文章を本人が朗読し、読み終わったところで秋桜子の批評を戴く。概して点が辛く、構成上の欠点を指

摘されたり、表現上の不備不熟を例示されることが多かったといえます。最も誉められるときでも、「俳壇ではこの位でも通用しようが、文壇ではまだまだ通用する域には達しない」とときびしい評言をされることが多かった、と倉橋先生。そこで想いだすのは、葉山修平小説教室に通っていたころ、構成上の不備や表現上の問題点を手厳しく指摘され、添削されたことです。むやみに漢字を使わないことを教えられ、とにかく修平先生は該博な知識の所有者で、間違った事は徹底的に直され、いい加減な事を書いたりすると完膚なきまでにやられ、文章修業のきびしさをやはり厭というほど、教えられました。

倉橋先生によると、秋桜子が文章会でよく言われたことは、「文字通り」という繋ぎの言葉を使わない。似たことでは「思わず唇を噛む」など、新聞のニュース記事などで使われるが、その元は「舌鼓をうつ」「頬っぺたが落ちそうだ」などの気恥ずかしい表現から発するという。とくに「手垢にまみれた」（この表現自体も問題だが）表現を、うっかりにも使わないようにしたい、と倉橋羊村先生は仰るのです。

短歌の文章修業について書くのに秋桜子の文章会について倉橋先生から教えられたことに沿って述べましたが、これは短歌についても通低すると考えるからです。

「太陽の舟」にも「文章教室」のようなものがある、いいと思ったりします。

なんにしても、創設者の阿部正路先生がすぐれた文章家であったことを思えばです。

歌会報告

本部歌会 5月例会(第363回)

(宮島記)

日時 5月8日(土) 13時~16時40分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 23名 出詠 28首

司会 原田 寛同人

ゴールデンウィークも終わり、若葉のすがすがしい季節。全国大会は予定通り実施。着々と準備が進み、現在参加者50名。まだ受け付けているので今からでもどうぞと三木同人。

・少年の瞳に逢ひたりきあかつきの朱の門に立つ過去を断ち

つつ「天山離離(雁の塔・朱の門)」

代表の解説、阿部先生が北京の街中で、癩癩玉を道路に打ちつけている少年を見られたのだ。そのことにより、先生の内にある父母姉の死の事や、諸々の怨念を断ち切り、新しく人生を始めようと思いつつ朱の門に立たれたとのこと。

今月は、力強く実感があり重みのある歌が、上位を占めました。

今月の高得点歌は先の通りです。

・八重桜海棠も咲く裏通り看とりの間の一寸お花見

月田 藤枝

・千年の風を纏いし滝桜命そそぎてゆるぎなき花

上田 やい子

・生涯を島出でしことなき父の遠忌に帰るしまなみ海道

渋谷支部 支部長/志賀 倭子

松岡 三夫
(志賀記)

日時 5月8日(土) 10時~12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 7名 出詠 7首

司会 志賀 倭子

今月は岡崎さん、河野さん、中村さん欠席で一寸淋しい支部歌会でした。土屋さんが支部歌会にお元気に出席される事を皆で願っています。

・車内にて吊り広告を読むだけで雑誌買わずに世相判断

丸山孝一郎

皆で話し合い、結句の「世相判断」の判断があまりに固い言葉なので「世相うかがう」になりました。

今月の七首詠鑑賞は、北川さん、佐伯さんで作者の作歌の思いを話して頂きました。

大田支部 支部長/庄司 久恵

(浅見記)

日時 4月26日(月) 13時~16時30分

場所 大森山王高齢者センター

出席 9名 出詠 9首

司会 浅見 時子

・乙女子のネイルアートの指先はしなやかに伸び春愁もあり

宮島マツエ

この歌人はいつもの事ながら着目が若々しく斬新。

水戸支部 支部長/長須 正文

(塩田記)

日時 5月9日(日) 13時〜16時

場所 ひと文化交流プラザ

出席 5名 出詠 11首

司会 塩田 秋子

ミニ講義は宮城県出身の落合直文の歌。あさ香社を設立。歌会は5名だけだったが意見続出、実りが多かった。

・淡雪の薄ら降り積む愛宕山溶ければさみどり鮮やかならむ

深谷 充代

水戸支部 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 5月16日(日) 10時〜12時

場所 ひと文化交流プラザ岩間公民館

出席 5名 出詠 10首

司会 深谷 充代

今年は天候不順により田植は一週間遅れときく。田畑の話、身体不調の話と題材多く活き活きした歌が多かった。

・風切りて自転車漕ぐ息子の家に私自慢の菰携えて

福地 啓子

月の船支部 支部長／川村 貴美 (狐塚記)

日時 5月13日(木) 13時〜16時

場所 宇都宮中央生涯学習センター

出席 4名 出詠 5首

司会 三木 勝

御多忙な中、足を運ばれた三木先生を中心に、全国大会の打ち合わせをメインに歌会を開催、貴重なご意見を頂き勉強

になりました。各支部の皆さんに那須塩原でお会いするのを心待ちに解散しました。

・冬の枝一枝残さず地に映ず眠れる村の天心の月

・麦秋の渡良瀬川を超えゆきて歌詠む友の待つ街に行く

三木 勝

・輝かしき写真のハガキ白木蓮空ろな日々の気を張り戻す

伊藤 モト

・やうやうに女神光来山の彩産毛の若葉初夏を背負い来

手塚ミツエ

・瑞々しき葡萄の房より香りたつ秋を思えり小倉遊亀の絵

松本 昭子

・委ねたる想いはらはら風に舞いわれをつつめる新緑の香

狐塚 秀子

各支部の皆さんには、遠路遥々お越しいただきありがとうございます。皆さんのご協力のおかげで無事那須塩原全国大会をおえることができました。

千葉支部 支部長／照山 好子 (渡辺記)

日時 5月15日(土) 13時30分〜16時

場所 穴川コミュニティセンター

出席 13名 出詠 13首

司会 森五貴雄

コミュニティセンターの敷地内の穴川公園の新緑が美しく憩う家族連れが多く、さわやかな五月晴れでした。歌会は岡部さん、斉藤さん、村田一枝さんが久し振りの出席です。季

節感溢れる歌が多く、活発な意見交換と高崎先生の丁寧な講評に、独り合点ので、歌の理解不足の私は歌会参加がとても勉強になります。

・たんぼの綿毛吹いてる一年生黄色い帽子に慣れて道草

村田 一江

・ここだけの話の弾むリビングに猫が目を閉じじっと聞いている 岡部千代松

・苗植うる傍の荒田を住み処とし雉子羽根震はせて高鳴きをする 高崎邦彦

柏支部／支部長 末次 房江 (石塚記)

日時 5月20日(金) 12時30分～15時

場所 アミューゼ柏

出席 8名 出詠 20首

司会 石塚 立子

昨日までの雨もあがり、櫟の緑が美しく映える柏の街。二十首の歌を一首づつ歌の背景を想像し、又、作者の想いなど聞きながらの歌会でした。

・みどりごを抱く地蔵のまろき肩にたんぼの絮ふはりと降りぬ 末次 房江

大田支部 支部長／庄司 久恵 (宮島記)

日時 5月24日(月)

場所 大森山王高齢者センター

出席 6名 出詠 6首

司会 宮島マツエ

真夏日のような暑さから、雨続きの昨日今日は、肌寒くレインコートのいる日でした。少人数ですが心をこめて。

・わが終の棲み家とならむ馬込邑あをばわかばに雨降り歌ま ず 川村 貴美

今まで三十三年間住んだ家を、耐震工事をして生涯の棲み家とした。あと何年か住む街、住む家をしみじみ眺めた時、「邑」「歌む」の二文字が浮かんた。二文字には深い深い人生がある。

掲示板

品川春季短歌大会が四月二十九日荏原文化センターに於て開催。次の会員が選に入りました。選者小島ゆかり先生。

選者賞 第4位 宮井 富美会員

互選賞 第2位 湯本 いと会員

お二人の栄誉をたたえます。

お詫びと訂正

(六月号)

十頁上段四行目 北へ↓北へ(ルビをとる)

お詫びして訂正致します。

ご注意下さい

最近のニュースで報じられていますが、短歌、俳句などやっておられる方に、あなたの作品は素晴らしいので新聞や雑誌に掲載してあげます、あるいは本にしてあげますと言葉巧みに誘って法外なお金を要求してくる例がありますのでご注意ください。くれぐれも被害に合わないようにならう。